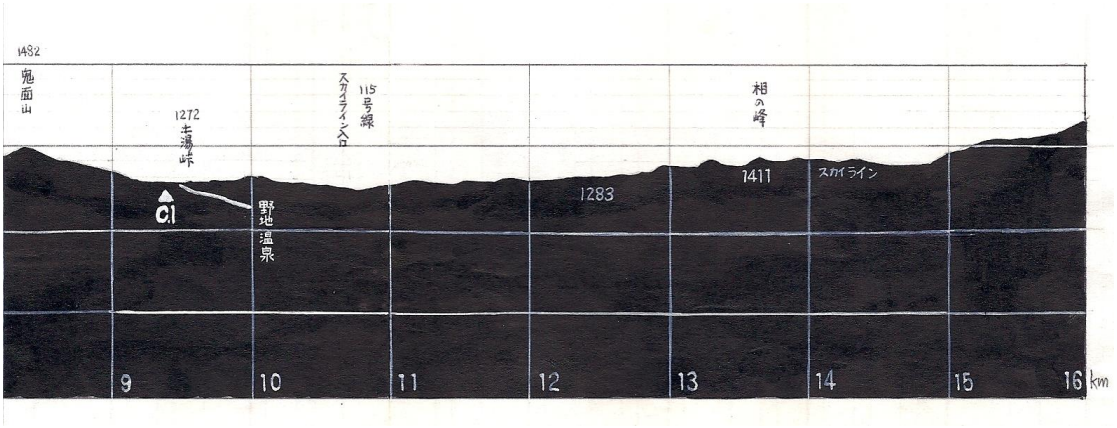
第四章　安達太良・吾妻連峰

岳温泉―安達太良山―土湯峠―吾妻連峰―白布温泉

「人跡の穢なき白浄の世界であった。その瞬間全天の雲幕が引かれて陽光燦然と箕輪山を包み至福の一時が訪れたのだった。一目瞭然の鬼面山の尖峰とそれに続く北尾根がくっきりと浮かび、わが針路を確実なものにしてくれている。」



安達太良・吾妻連峰積雪期縦走

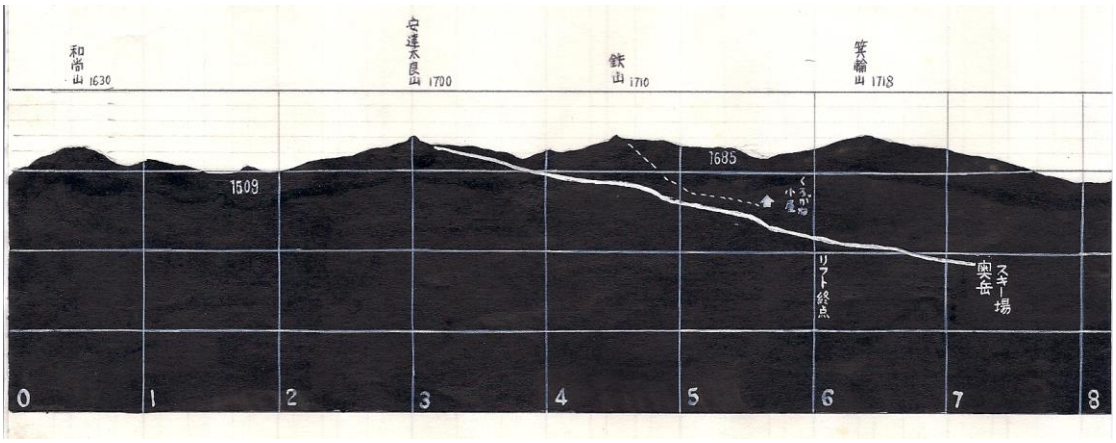
平成九年三月二三～二六日

今出隆康(単独)

ヘールボップ彗星が輝く今冬は積雪少ない年となり、百武彗星が輝いた去年は多雪の年であった。標高の低いスキー場はすでに閉鎖しているし山々も薮の多い尾根はちょいと敬遠されるところとなった。県境尾根としては二〇〇〇メートル級がずらりと並ぶ吾妻連峰は雪少なしと言っても狙い目ではないか。できれば安達太良連峰を含めて縦走したならやり甲斐がありそうだ。測距すれば四二キロメートル程なので三泊四日でやれそうに思われた。妻は三月二日に日本を離れ一ヶ月滞在の予定でカナダはヴァンクーバーに翔んで行った。長女あづさの出産手伝いである。七日国際電話で男子誕生とのこと、遂に俺も爺様になってしまった。

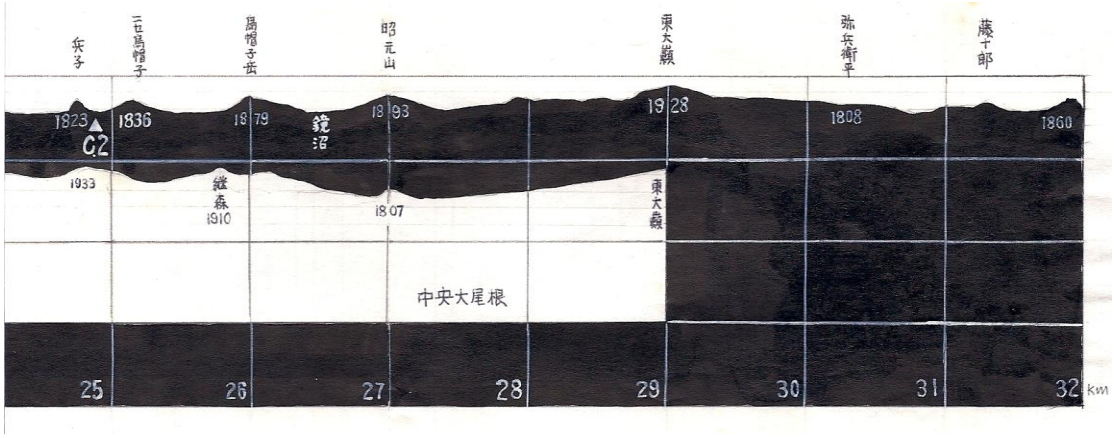
三月二三日

日曜日次女ゆきよ三女たかねの運転で福島は岳温泉へと向かった。天気は前日二二日が終日雨降りであったが天気が快復し、晴々と山々は見渡せなかったが上がり目の夜明けであった。マイワイフ(吾妻)連峰は天元台に近年二、三度行ったものの十年程ご無沙汰している。夏期(無雪期)は観光のメッカで俗臭プンプン、土湯峠からのスカイラインは尾根上のアスファルト道路で安達太良・吾妻を連続縦走することは殆ど不可能と言うか無意味に近い。あるいは観光客の好奇の目を浴びながら屈辱に耐えて実行するか、スカイライン・ゲートからの進入も許されるものか？夜道にお忍びでやらざるを得ないものか？誰憚らずに実行できるのは雪で閉鎖されている期間が可能な縦走と言える。主稜上最低の鞍部は



土湯峠の一二七二メートルであるが、その周辺以外は二〇〇〇メートル級の山々の連続であり従って積雪も比較的安定している。

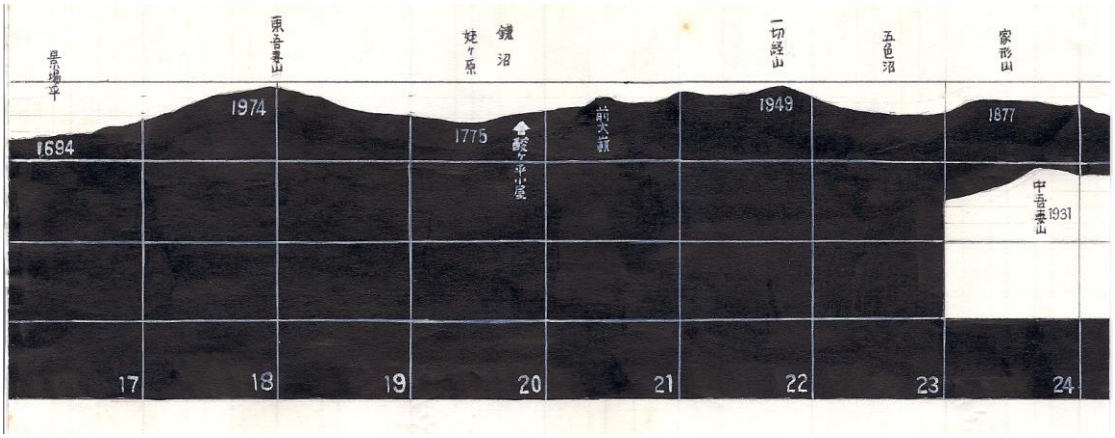
安達太良山への路上に残雪はなく楽々と奥岳スキー場に到着、スキー客の車が二〇台程並ぶ。風もなく寒さも大したことはない。スキー場はやはり雨だったらしくザラメ雪が踏み固められている。ゲレンデ経由で登ろうかと思っていたが登山口からスキーやワッパの跡があったので、ゲレンデ荒しを避けて五〇センチ位の積雪のある夏径を踏んで行くことにする。登山名簿に記入する時、既に今朝入山した人の名が載っていた。残雪は程よく堅くツボ足で歩けて快適でザックの重さも気にならない。雪が多く陽はなかなか出て来ない。勢至平への途中、何人かの登る人下る人に出逢った。勢至平へ出るとスキーを履いた高校山岳部らしい十名程のパーティに出逢う。山スキーではなくゲレンデスキーを履いて転び転びやってくる。多分くろがね小屋にでもテントを張っていたのだろう。三〇年前のわが山岳会にタイムスリップして懐かしく、その中でもパーティから残された下手糞野郎が雪の上を這いずり廻っている様はおのれの姿をまの当たりに見る思いで感慨もひとしおのものがある。勢至平から新雪帯となりこの辺が雨と雪の境だったのかと思われた。一五センチ位の新雪と前日歩いた足跡が続き、しばらくはツボ足で頑張ったが一休みの所でワッパを履き替える。八：三五　勢至平は風強く時々小雪降る。小雪と言うより霰っぽい。雪はシマッテいるが新雪が所々吹き溜まりラッセルもある。たまに這松に足をとられる。籠山付近はリフト利用の登山者が多くぞろぞろと行列でやってくる。これなら楽だし最短距離で安達太良頂上を往復して帰って行くのに便利であろう。何しろ安達太良山は人気の高い山であることには間違いない。頂上はたおやかな盛り上がりの上に一五メートル程の岩塔となっており東側の風の当たらぬ所で何人かが休みガスを点じて煮炊きする人もいる。頂上は後廻しにしてザックをデポり和尚山の方角をめざして歩く。和尚山へは夏径の標識もあり緩慢な広い平らとなっていてツボ足が時々小潅木や這松を踏み抜いて歩きずらい。



天気もイマイチ冴えずこの広い大斜面でガスられたらシンドイなと思いつつ空身の心細さを噛みしめながら鞍部を目指す。和尚山への尾根上を何人かの人々が黒い点となって南下していく姿が見える。おお和尚山にも人が行くのだ、なかなか角張った雄々しい姿の和尚山、安達太良山より数十メートル低いだけであるがちょいと独立峰的存在で登高欲をそそられる。ラッセルとその下の浅雪で前進もままならず鞍部寸前にて断念に至る。往復は五キロメートルに近いアプローチ、ザックをデポしてはその行動範囲に無理がある。ガスられてルートを失ったら本当に和尚さんにお経を上げてもらうハメになるのだ。

引き返してザックデポへ、次にザック担いで岩塔を攀じて頂上へ。風が強くてセルフでシャッターは無理、丁度同時に登ったビデオ持参の人に一枚お願いして撮ってもらう。さあ、ここからは強風との闘いで縦走が始まるのだ。爆裂火口の尾根径はピッケルよりもストックの方が長いだけ有利だが背を丸めて右手のピッケルで一歩一歩支えながら前進する。矢筈ヶ森が接近すると突如沼の平爆裂火口が現れる。沼の平一四五二メートル標高、約二〇〇メートルの落差で俯瞰され中央部は地熱帯らしく地面が広がっている。色は黄色や灰白色の裸地となり温度が高まっている様子である。

一木一草もない矢筈ヶ森から岩壁を黒々と城砦のように頑固な山体の鉄山へと進行する。西側岩壁をトラバースするように捲いて鉄山の頂上へ、この付近は殆ど人影もないがスキーの踏みあとがある。大抵の人は安達太良本峰と沼の平を見て復路はスキー場へ帰るか鉄山を循環してくろがね小屋、勢至平と行くらしい。観光景観の目玉が終われば巨大な平頂の箕輪山が次第にクローズアップしてくる。これは真白な盛り上がりで樹氷も所々に見られる。その鞍部に小屋が一軒黒いアクセントとして存在する。小屋をめがけて平坦なスロープを時々は片足を陥没させながら下りて行く。小屋の窓が開いているので覗き込むと四・五人のスキーヤーが小屋を占領して煙と匂いで充満させながら焼肉パーティをやっていた。すぐ通過しようかと思ったが丁度一二時、我慢して仲間に入ることにした。入り

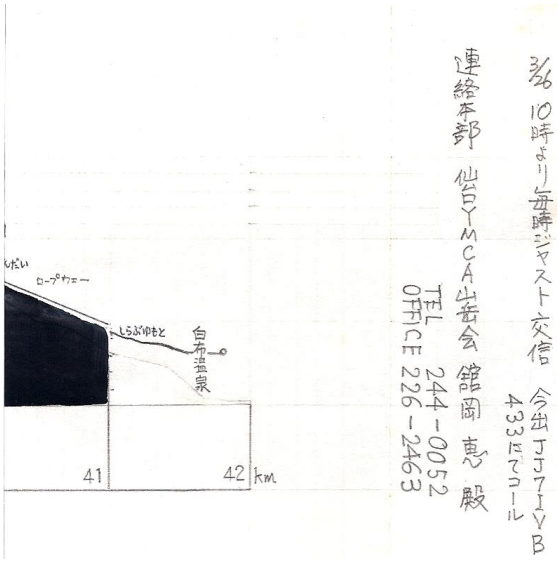


口は扉の故障で一五センチしか開かず人間の出入りは不可能なので皆窓から出入りしているのだった。ザックを外に握り飯とテルモスを持ち窓から挨拶をして入る。凄い重装備だネ、ドゴザイグノシャときた。尾根伝いに白布高湯だと言うと何泊するのと聞く。三泊四日と言うとそんな日数で行けるのかなと皆で宴会の肴にしている。外は風が寒いので昼食を無風の小屋内で済ませることができて幸いであった。

曇り空がどんよりと、そして冷たい風が続いていた。一五センチ隙間から身を潜らせて脱出しこれよりワカン着用とする。鉄山避難小屋を出て針路真北に地図磁石を時々照合しながら白い大地を行く。鞍部への下り数十メートルの落差で落ちる所があり雪の下のツツジ性の樹帯に何度か陥没しては雪面で泳いだ。そして樹氷の三ツコブに輝く一七一八メートル安達太良連峰最高峰へは一三：一〇に登頂、人跡の穢なき白浄の世界であった。その瞬間全天の雲幕が引かれて陽光燦然と箕輪山を包み至福の一時が訪れたのだった。一目瞭然の鬼面山の尖峰とそれに続く北尾根がくっきりと浮かび、わが針路を確実なものにしてくれている。

今夜の宿はどのあたりになるか、ほぼ予定通りの土湯峠までは堅いなと思った。箕輪山の下りにガスられると迷走型地形として警戒していた一ポイントであったから助かった。下りは少し西に寄り過ぎたので大きく腹を捲いて東へと変針し痩せ尾根状へ廻り込み一四八三メートルの中間地点に着き、あとは鬼面山のトンガリをめがけて直進する。

鬼面山からは気温が上がり粘り雪となり少々難渋しながら雪原の土湯峠に下り立つ。旧道土湯峠は積雪数十センチの中にも路形が判る程で部分的に露岩、砂礫の箇所もあり古い標識も見られる。原の西端に小山がありパラボラ電波塔が立っていて、その周辺は黒森が繁茂している。峠道を横断してその小山目がけて緩やかに登って行く。何かチェーンソーのようなモーター音が遠く近く響いてくる。ザックをデポして新土湯峠へのルート偵察に出かける。程なくまたモーター音が響き雪面上にスノーモービルのシュプールが沢山現れ

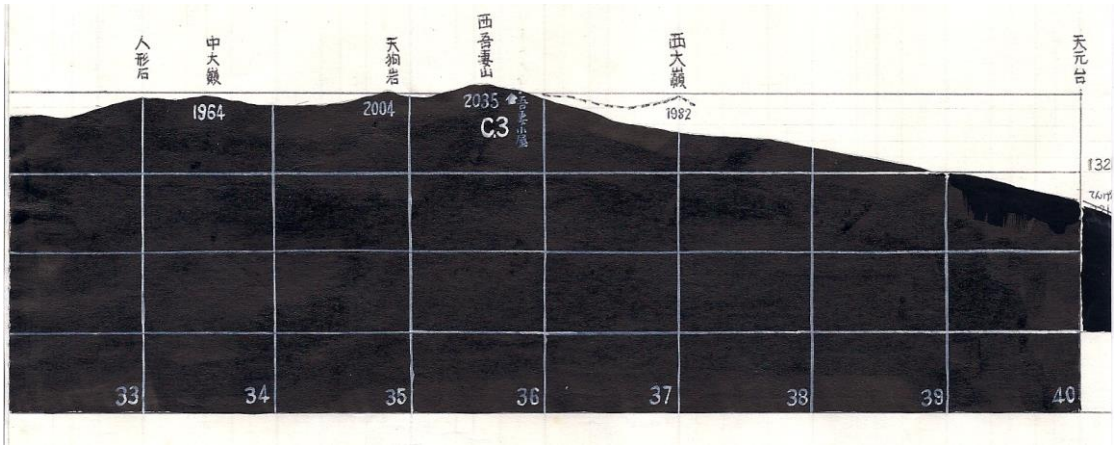


る。この付近一帯の緩やかな丘陵地形はスノーモービルのゲレンデなのだと知る。野地温泉や鷲倉温泉を基地にこの周辺を走り廻っているのだった。そんな場所に深入りしたくはないので彼等の襲来を警戒して丈夫そうな立木に固まれた平坦な雪面にテント場予定、そしてデポ。偵察は最初パラボラタワーに向けられ、それから小山を下り三〇〇メートルを歩いて鷲倉温泉を見下ろせる崖の上に立つ。除雪された国道土湯道路はここまで通じていてRV車など十台位来ている。一六：三〇　緩やかな夕暮れの中テント設営も終わり、更に西側立木をベースにした防風ブロックの建設も行う。これは雪洞鋸で長方体に切り出した堅めの雪を三段ほど積み上げる。しかし平和なテント村にけたたましいスノーモービルの一団がやって来た。テントから一メートルまで、接近して遠ざかって行った。夜もライトを灯けて暴走しては来ないかと心配だったが、それが今日の最後のツアーだったらしく山に静寂が戻ってきた。立木のガード何とも頼もしいこと、山とはいえ熊より恐い、二〇〇キロ三〇〇キロの巨体でテントを潰されたら即死しかねない。無風の夜はやがて雪降りと変化して行くのだった。

三月二四日

夜中風の音を聴いていたような気がした。テントにうっすら雪がかぶさる。

四：五五　起床、朝食とパッキング、服装テント撤収。七：〇五　ワカンを締めて出発。新雪がスノーモービルの轍を埋めている。昨日の偵察折り返し点より藪を逃れて一段低い台地へと変針しモービルのゲレンデ地帯を横断して行く。一二七一メートル、本県境縦走の最低地点を通過中である。真平らなグラウンドが現れて国道と有料道路のジャンクション、スカイライン入り口、新土湯峠に着く。やや視界よけれど冬型気圧配置か寒冷で強風が吹き荒ぶ。シャッター扉を閉鎖した巨大なドライブインが氷雪に埋まっている。ポツンとバス停標識「土湯峠」。スカイラインのゲートをくぐりいよいよ吾妻連峰へと足を入れ



る。この地点は土湯温泉、安達太良山、中ノ沢、吾妻山の四枚の地図の接合部で強風の中で地図を読むのにまことに都合が悪い。この先四キロメートルは比較的ヤセた尾根の上に削られた道路で小ピークを捲き捲き続いている。雪も例年より少なくてその上に新雪もありクレバスに陥入り易い。尾根を忠実に辿るのはずい分時間もかかりそうなのでスカイライン上を辿ることとし腹を決めて進む。

八：一五　雪堤の上で休憩。風道の場所はアスファルトが露呈し透明な氷が張っていたり雪堤がうず高く盛り上がったり抉り取られたり無雪期は観光バス・乗用車が列をなして通過する観光ドル箱線とは想像できない。一〇：一〇　相峰を過ぎて一キロ、東吾妻山の巨体にぶつかる頃スカイラインは二〇〇メートルの高度を稼ぐため三回の大蛇行をしてその距離は一〇〇〇メートル以上の片道を三往復する。計画としては東吾妻山に直登して一切経を目指すものだったが次第に風雪が酷しくなりどんどんワカンラッセルの抵抗が増して今夜のテント設営は難しく思われてきた。大曲点地点は最短距離とし法面の急斜を攀じてジリジリと高度を稼ぐ。二、三回法面の突破を試みてスカイラインに乗り上げる。しかし急斜のショートカットは果たして得なのか損なのかと悩みながらの行動で山にまで来て何を悩むことがあろうかと又悩むのであった。どっちが得かは別にして一応風雲急を告げる中を取り敢えず吾妻小屋を目指して避難すべしの命題を掲げて黙々と、時には奇声を発して我を励ましスカイラインの路形をラッセルして行った。

大曲点を通過すればあとは直角に針路改まりほぼ真北に向け土湯温泉から這い上がる荒川の源流を右手に眺めながら平坦路となる。スカイラインの最高点一六〇六メートル鳥子平を通過する。スカイライン最高地点の木製の標識があるが殆ど平らだしこの地点を意識するドライバーは果たして何人いるだろうか。積雪期なればこそ可能なスカイライン踏破でもあるしこんな路傍の標識にも愛着を覚えたりするものであろうか。ワカンのラッセルも二〇センチは続いているしときに膝を没する地帯もあり、絶え間ない大雪は明日まで

続くやら、これ以上のラッセルともなればペースはもっと下がるに決まっている。東は一八〇五メートルの高山、西は一九四五メートルの東吾妻山の鞍部平は旧雪一・五メートル位か、しかし路型は判然としている。程なく道は東に緩やかにカーブし次第に北向きとなり広々とした平野に出る。ここに標識があり吾妻小屋・キャンプ場などの入り口とある。すぐ黒い針葉樹林の林間となり何となくファンタステックな森の小径を辿って行くと広々とした兎平のキャンプ場が南に拡がっていた。大きな管理棟がありその先を辿れば一度も訪れたこともないのに懐かしい山小屋の匂いを感じた。雪二メートルに埋もれて無人の小屋が静まりかえる。小関君が吾妻小屋は抜群にいい小屋だと言った言葉を思い出す。入る前に写真を二、三枚撮る。一三：〇〇の少し前であった。

小屋入口まで、巾広くラッセルで踏み固めつつ歩を進める。木の枝のおとし錠を上げれば戸は静かに開いた。吹き込む雪もごく僅かであった。塵一つない清潔な板の間、雪のため思ったより明るいのだ。ワカンを脱ぐ前に炊事用の雪ブロック取りをやり、ワカン、スパッツ・登山ブーツを脱ぎブラシで浄めて吊るす。大部屋に入ってみると広い。真央にストーブ、テーブルが三脚、本棚には山の本、植物図鑑、天文の雑誌など並ぶ。天文の雑誌最近号もおいてありヘールボップ彗星の記事で溢れている。午后は休養日となったので独りで淋しいが天国のようなこの部屋でのんびり暮らそう。北側に一段高く寝室となっており布団毛布が整然と一五人分位累ねて並べられている。厚地の仕切りカーテンもある。吾妻小富士、一切経山、鎌沼など黎明や雪景など名場面が壁に三〇枚掲げてあり部屋全体がギャラリー風である。殊に吾妻小富士が抜群に多くこの山への思い入れが感じられる。天井にはギヤマンのランプとか三連式のシャンデリアもあり山上の別荘の貫禄がある。一合パックの酒をチビチビなめながら二泊目の夕食の調理をする。部屋は立派でも寒いので停滞も結局はシュラフに入って時をすごす。天文雑誌を見たり一六時の天気図を描いたりする。いいぞ、明日は晴天になる筈だ！今日の停滞は明日のための休養日なのだ。「あの小

屋はいいらしいよ。山岳雑誌で寝具からストーブから完備でとても立派だし日本一らしい」と小耳に挿んだ言葉で急逮予定外のルートの小屋に立ち寄ったものだ。夏期にも一度来て泊まりたい。どんなマスターなのか逢ってもみたい。ストーブは使わなかったが寝具は使わせてもらった。敷布団にシュラフを使い毛布を掛けて寝た。快適な一夜であった。

三月二五日

夜明けが来た。嵐が去って月夜の夜が残り窓が少し白んできた。急いでラーメンを煮て汁にめしをつっ込み胃の腑に流し込んだ。テルモスにも茶をしっかり詰める。どんどん窓外の景色が見え出す。静かな山の朝であった。元の通りに寝具を重ねゴミを片付けザックにしまい込む。ワカンを履きザックを背負って小屋の扉に感謝の言葉をかけながらカンヌキを落とす。

六：二〇　雪は締りつつもザクザクと一〇センチ位はぬかる。いつも初めのうちはザックの背中にフィットした確かな重量感が頼もしく、これさえ身を離さなければ生命を守れる信ずべきものの喜びを感じるのだ。後半疲れてくると巾五センチの二本のベルトが肩の肉に突きささるようで苦痛にさいなまれる状態にもなるのだが少しずつは荷が軽くなっていくはずだ。吾妻小富士の西壁を見ながら桶沼をまわり黒樹の中を登って行くと桶沼の淵に出る。ザックをデポして沼の畔まで降りてみる。可愛い火口湖が姫小松に囲まれて真白く眠っていた。二、三枚写真を撮ってデポに戻り今度は一切経山の撮影をする。風はやや強いが雪もほぼ締まり一切経山など明るく朝日に輝き絶景である。浄土平は一大雪原となり天文台のドーム屋根などの人工物も眺められ一切経の東壁が荒々しい。しかし一切経山の噴煙は今は止まっているのか、静の中の唯一の息吹は眺められず残念に思った。夏、観光客溢れる浄土平も人間一匹だけの清浄境、これだけの壮大なロケーションを独占する贅沢さと俗人が足跡で汚す後ろめたさに戦いながら一切経と蓬莱山の峡部へと風に抗し

て歩を進める。吹き溜まりだらけのラッセルで、岩屑と堅雪のためぐんぐん高度が上がっていく。

八：一〇、一切経山に登頂、ほとんど着雪のない岩屑の平だ。偏西風が猛烈で立っていられない。烈風の中で吾妻小富士の擂鉢を俯瞰して撮った。清澄な空気が天地に溢れ風景は欲しいままで越え来し安達太良連峰、割愛してしまった東吾妻山、延々と続く吾妻連峰の主稜に派生する巨峰群に見とれてしまう。眼下に吾妻山の瞳、五色沼が真白に一〇〇メートルの円鏡となって冬の眠りを続けていた。吾妻小屋は見えないが桶沼の小さい盛り上がりと小さい湖面も可愛いアクセントだ。磐梯山の竣峰も遥かにエールを返してくれそうだ。さて向かい風を制動力に五色沼への急降下となり次第に樹林帯に吸い込まれるように下っていく。五色沼にはシュプールが何条か横断して湖面を渡った奴がいることを示している。罰当り奴！湖岸を北上して家形山への上りとなる。高度差一〇〇メートルで黒森の中に迎え入れられる。この頂上を約五〇〇メートル突破して兵子へ出るわけだが山形・福島の県境はこの家形山の上で直角に北へ湾曲する地点でもある。すんなり突破できると軽く考えていたが積雪期はなかなか難しい地形なのだと自覚するまでさして時間はかからなかった。アオモリトドマツの密林であり積雪は柔らかく膝までのラッセルに岩屑地帯で楽してきた分非常な抵抗となってくる。樹高は五メートルもあり先の見通しは悪くて周囲は樹林でいずれも閉塞状態なのである。たまに赤布のようなものもあり辿ってみると県境方面へと北へ向き、これはＫＯ山荘に通ずるもののようであった。再び山頂と思われる平の真中へ戻りザックをデポして、気分を変えるために軽食と休憩をとり地図磁石で平頂部を偵察ルート工作を繰り返す。晴天下の彷徨だ。視界さえよければ進路は確定するといった驕りは打ちのめされた。ワッパのまま樹登りもならず三〇〇×五〇〇メートルの樹林の中を深いラッセルをしながら智慧のありったけを使って県境を辿ろうと努力した。黒森には魔性が息づいている。こんな陽光のもとで何で迷って狼狽しなければならないのか。森

の魔性だ。八幡平の八つ瀬森の彷徨を思い出す。山の頂上で迷うのだから情けない。北面が断崖となっているので覗きながら上縁を辿ればいいと頭で判っているが山体全部が黒森で傾斜が急な分新雪が吹き溜まっていて腰まで埋まって動きが取れなくなる。一進一退をくり返してどうやら県境を辿り次なるピーク尖峰の兵子の手前で一息ついた。一〇：四〇から一キロメートルにも余る距離の突破に一時間四〇分を費やしてしまった。この先の山々はよく見えている。ニセ烏帽子山（一八三六メートル）も樹木高く難渋させられる。樹林に入るととたんにラッセルが深くなる。昨日の新雪ばかりでなく旧雪も太陽や風の影響を受けずにクラストできないでいるものだ。

次の烏帽子岳（一八七九メートル）はやや樹高が低く下り西面は倭性の潅木となり楽になってきた。昭元山（一八九二メートル）は一四：一五登頂。時間がかかっている。ずいぶんラッセルが深すぎる。一挙手一投足が全体スローモーなのだろう。中型ピークの連続のこの地帯を突破すれば平原上の地形となる。風は終日強くいつも向かい風である。一五：〇五 東大巓手前の大雪田で休憩する。連峰のラッセルから解放されれば今度は吹き曝しの大雪田地帯だ。地吹雪が荒び顔面に雪礫が痛いので、顔面を伏せて歩いていくと雪面を流れる雪粉が急瀬のように目まぐるしく流れる・・・流ればかり見ていると目眩するような錯覚に陥る。それでも白い大地の彼方に明月荘が心強く立っている。

一五：三〇 東大巓頂上。西吾妻山にかけてのおおらかな曲線の山体と白い雪原、雪原の中に所々樹氷も見られて美しい風紋が大地を彩る。視界も申し分なく南に伸びる中央吾妻の巨大な尾根、継森・中吾妻山など樹氷に飾られて見事である。この尾根を往復したい気持ちは充分あるのに樹氷帯のラッセルと針葉樹の厚い壁の突破は家形山で苦労したばかりの身には恐ろしい魔境に思えて安易な冒険はできないのであった。北を眺めれば直線一〇〇〇メートルに明月荘が見られ少しく傾きはじめた太陽にせかされて左頬に強風を受けながら歩き出す。一大平原のような尾根なので明朝ガスられると大へんなので所々に

赤布を結び付ける。一六：〇〇 明月荘は勿論誰も居なかった。安全そうな雪塊を確保してから土間に靴を脱ぎ室内にテントを張った。明るいうちに夕食を済ませて早めに就寝した。夜中も強風は荒れ続けて軒につるされている鐘が夜半に何回も鳴って目を覚ました。最初鳴ったときは誰か来たのかと思い先年この付近であった東京のスキーパーティー五人の遭難死事故を思い出し少し気分が悪くなった。

三月二六日

四：三〇 起床、夜来の嵐は鎮まっていた。七：一〇には明月荘を出発する。七：五〇 休憩、 吹曝しの雪原にスキーシュプールが所々あり赤旗竿なども立っていた。天元台をベースにここまで来たパーティーがあったのだろう。雪原はウインドクラストしていて歩くペースは軽やかだ。ここは弥兵衛平か藤十郎のタルミあたりだ。人形石で水を飲もうとしたら先ほどのパッキングの際少し無理して押込んだ二リットルのポリタンクが割れてしまっていた。幸いビニール袋を被せておいたのと水量が少なかったことで被害はなかったが氷の混じった水を吸い残りを捨てて空タンクにしてまたザックに蔵い込んだ。一五年以上あらゆる山にお伴した水筒に感謝した次第であった。

八：五〇 中大巓に登る。西吾妻はほんの目の前だ。頂上には樹氷群が燦然と輝く。一旦鞍部に下り樹木の所々に茂る雪面をラッセルしていると右手の針葉樹林帯を行く三名パーティーと平行状態でクライム中と知る。よく見ると佐藤芳樹君と鏡君と渡辺君の三名ではないか、ヤアヤアと声を掛け合って合流する。渡辺君が予定外だったので、最初他のパーティーかと思っていた。九：四五の出会いであり梵天岩も近かった。三人はスキー隊なので行動は素早い。ワッパはラッセル分遅くて追いていくには少ししんどい。

一〇：一〇 西吾妻山頂上。吾妻連峰の最高峰、唯一の二〇〇〇メートルを超す二〇〇五メートルなり。頂上といっても本当に平らなので樹氷原のここが頂上と言えばそこが頂

上なのであった。樹氷が美しくて記念写真を何枚も撮る。そして休憩と昼食、よい天気と思っていたが次第に雲量も増して日も翳ってきた。一二時の交信を約束してスキー隊は若女平へと滑って行く。黒森の中はフカフカの雪で膝までのラッセルがある。風も穏やかで結構だが空には巻雲が密美し少しずつ天気下り坂かと思わせる。途中二、三人のスキーヤーと出会いながら黒森を分けていくと縄を張った天元台へと導く冬道レーンがあって助かる。リフトの上駅へ出たとたん深雪から解放され足は急に早くなる。賑やかなゲレンデはスキーヤーとかボーダーに当てられぬように端の方を大股に下って行く。

一二：〇〇 ゲレンデ中間駅付近で休憩、トランシーバーを四三三で解放して受信を待つが入電なく、やむなくそのままゴンドラ駅へとワッパをぶら下げて下っていく。一二：四〇発のケーブルカーに乗車。ユラリユラリと天界を繋ぐ乗り物が舞い下りて行く。下駅が近づくとスキー三人衆が道路を歩いているのが見えゴンドラ内から今到着するぞと手話で知らせる。駐車場には両者同時に到着。一三：〇〇 四人乗車して発車、白布温泉から仙台を目指す。リーダーの佐藤芳樹君が白石に転勤の為急に忙しくなったとのことで急遽の帰仙となった。天気はとてもよく晴れ春めいた街々を次々と通り抜けで行くのだった。我が山岳会の仲間が単独行縦走の下山路をサポート行動してもらい本当に嬉しい。まあつきなみな安達太良・吾妻縦走ではあるが冬期だからこそ可能とは言えない全て夏径の上ではあったが年間何十万人の観光客で賑わうスカイライン上を歩くところもあり両山を夏山縦走では実施し難い一面もある。去年は八幡平大深岳で巨大な百武琴星と対面できて大きな感動を覚えたが、今回はヘールボップ慧星に相まみえんと欲したが三ツの泊り場は二ツの荒天と一ツの曇天で機会に恵まれなかった。その代わり吾妻小屋の天文マガジンの専門誌で倦きる程ヘールボップ琴星の写真や解説を見せてもらった。あの豪華な冷凍庫のような空間でシュラフから目だけ出して読んだ吾妻小屋の図書館が懐かしい思い出である。

（やまびと季報一八号掲載）

概念図
安達太良・吾妻連峰積雪期縦走
3/26 13:00
大笠山
白布温泉
笹輪
天元台スキー場
明月小屋
C3(3/25)
烏帽子
平子
藤十郎
若女平
東大嶺
中大嶺
昭元山
家形山
梵天岩
(サポート隊合流)
西吾妻山
一切経山
西大嶺
継森
二セ烏帽子
前大嶺
吾妻小富士
吾妻小屋
C2(3/24)
東吾妻山
高山
幕川温泉
相峰
C1(3/23)
鉢森山
鬼面山
土湯峠
至 土湯温泉
スキー場
笹輪山
避難小屋
鉄山
奥岳スキー場
3/23
安達太良山
薬師岳
至 岳温泉
和尚山
前ケ岳